対馬における「コヤ(板倉)」の 建築構法の特徴

THE CHARACTER OF THE WOODEN CONSTRUCTION SYSTEMS OF STOREHOUSES “KOYA” IN TSUSHIMA IS. NAGASAKI

小林久高 — * 1 安藤邦廣 — * 2
黒坂貴裕 — * 3 濱 定史 — * 1
柳 和 先 — * 1 釜床美也子 — * 1

Hisataka KOBAYASHI — * 1 Kunihiro ANDO — * 2
Takahiro KUROSAKA — * 3 Sadashi HAMA — * 1
Hwasun YOU — * 1 Miyako KAMATOKO — * 1

キーワード:

対馬, 倉, 木造構法, コヤ, ヒラバシラ

Keywords:

Tsushima, Storehouse, Wooden construction system, Koya, Hirabashira

In Tsushima Island, characteristic wooden storehouses are distributed. They are constructed with large stony roof and pillars have rectangle section.

The distribution and the structure of storehouses are investigated on this report. As a conclusion it is realized that the construction system of storehouse of Tsushima has high originality against other part of Japan, and on the detail of structure present some difference depending on size of stony roof.

1. はじめに

長崎県対馬市には「コヤ」¹と呼ばれる板倉が数多く分布している。長方形断面のヒラバシラを用い、屋根は板石で葺かれるなど特徴的な構法の見られる建築物であるが既往の研究は少ない。建築構法に関する報告としては石原²によるものが最も古い、主屋の調査に伴う概略的なもので、コヤの建築構法の特徴を記述するには至っていない。近年の浅川³による報告は事例数が2例と少なく、構法の詳細については触れられていない。その他には民俗学の分野からの矢野⁴の貴重な報告があり、多くの聞き取りに基づいたコヤに関する記述が見られるが、構法に関する記録は不十分である。集落研究においてコヤの群倉立地について触れたものはいくつか見られる⁵。

本報告は他地域に見られない形式をもちながら本格的な調査のなされてこなかった対馬のコヤの建築構法についての詳細な調査を行ない、その特性について報告するものである。

2. 地域の概要

対馬は長崎県と朝鮮半島の間位置する島である。地形は急峻で平地は少なく、島の約9割を山地が占めている。多くの集落は河口付近の三角洲地帯に位置し、耕作地が少ないため焼畑農業が近年までおこなわれていた。海産物資源の豊富な地域であるが、ほとんどの地域において農業が主体であった⁶。太古から大陸文化流入の窓口となっていたが、江戸時代においては、対馬藩の政策により外部との接触は制限され、集落外への移動さえ自由にはならなかった⁷。このため昔の民俗文化が色濃く残されている。

3. コヤの分布状況

コヤは全島に渡って隔々まで分布している。コヤの主要な用途は穀物の収納倉庫であるため、農業を行なってきた全ての集落においてコヤを見ることができる。群倉をなしている集落が多く、特徴的な景観を見せている。多く見られる地域は南西部、北西部、北部で(図-1)その他の地域においてはいくつかのコヤが散在している程度である。石屋根が残されている地域は、南西部に限られる(図-2)。

本調査は2004年10月2日～10月15日および11月18日～12月14日にかけて実施した、主要30集落の分布概要調査(次頁表-1)、12棟の建築実測図採取、コヤの所有者と大工に対する聞き取り調査に基づくものである。

図-1 コヤ分布状況
(集落番号は表-1に対応)

図-2 石屋根確認棟数

*1 筑波大学大学院博士課程人間総合科学研究科 博士課程・デ修
(〒305-8574 茨城県つくば市天王台1-1-1)

*2 筑波大学大学院人間総合科学研究科 教授・工博

*3 奈良文化財研究所

*1 Doctoral Program, Graduate School of Comprehensive Human Science, Univ. of Tsukuba

*2 Prof., Grad. Sch. of Comprehensive Human Science, Univ. of Tsukuba, Dr. Eng.

*3 National Research Institute for Cultural Properties, Nara

表-1 各集落のコヤ残存状況一覧（集落番号は図-1に対応）

集落番号	集落名	コヤ残存状況概要
01	鱈浦	対馬最大の群倉、200棟以上。コヤは小さく、下屋を持たない。漁具や家財を収納しており、1軒につき2〜4棟所有。
02	豊	3棟のコヤを直線状に並べ1枚の屋根で葺いたものがある。
03	舟志	7群の群倉が形成されている。コヤの残存数は84棟。前面に下屋を持ち、下屋部分に床を張った形式が見られる。
04	茂木	現状の戸数が4戸。敷地内のコヤが数棟残されている。かつては海沿いの群倉があったが現在は無し。
05	芦見(葦見)	川沿いに群倉。
06	友谷	道路を挟んだ対面にコヤが立地。
07	湊	川沿いに群倉。
08	大保家	内陸部の農村集落。広大な耕地を所有。コヤは敷地内に立地。
09	志多留	4群、計53棟の群倉がある。その他個別のもの13棟。四隅にヒラバシラを用いているものが多く、柱の樹種も異なる。
10	田の浜	川沿いに群倉。近年まで石屋根が残っていた。
11	伊奈	川沿いに20棟ほどの群倉。
12	越高	3群の群倉。石屋根が部分的に残っているコヤが1棟あり。
13	三根下里	河川の氾濫に備えた床の高いコヤが多い。宅地内、または隣接して立地。
14	青梅	集落中央の田地沿いに18棟の群倉。
15	木坂	集落から川をはさんだ対岸に24棟の群倉。
16	曾	河川の氾濫に備えて床の高いコヤが多い。梁間・桁行とも非常に大きい。宅地内、または隣接して立地。
17	横浦	入り江の堤防上に群倉。
18	本鴨居瀬	宅地内の海側にコヤが立地。現在確認できたのは2棟。網元が地引網を収納していたアミコヤが残っている。
19	島山	石屋根に用いられたシヤマメシの産地。現在は石の生産はおこなっておらず、石工の技能も途絶えようとしている。
20	大船越	コヤは1棟しか残っていない。
21	卯麦	川沿いに小規模な群倉。他は宅地内にもコヤあり。
22	佐志賀	コヤは宅地内に建てられており、確認できたのは4棟。
23	廻	コヤは宅地内に建てられており、確認できたのは4棟。
24	久田	石屋根に用いられたクタイシの産地。現在は石の生産はおこなっておらず、石工の技能も途絶えようとしている。
25	尾浦	海沿いに3棟の群倉。
26	安神	海沿いに小規模な群倉。
27	豆股内院	道沿いに小規模な群倉。墓の立地と重なっている。
28	吹崎	川沿いに小規模な群倉。
29	今里	川沿いに7棟の群倉。宅地近くの立地が3棟。
30	煙根	宅地内の道沿いにコヤを所有。
31	椎根	川沿いに16棟の群倉。その他宅地近くのコヤなど22棟。石屋根の石材が特に大きく立派。
32	久根田舎	川沿いに12棟の群倉。その他個別に30棟。石屋根が多数見られる。
33	久根浜	海沿い、川沿い、道沿いに3群、計31棟の群倉。その他個別に5棟。下屋に床板が張られている。
34	佐須瀬	田地沿いに19棟の群倉。
35	豆股	海沿い、川沿いに2群計14棟の群倉。豆股石葺きを再現した新築のコヤあり。

図-3 コヤ利用法 概念図

図-4 下屋形式による類型

図-5 梁間・桁行寸法の分布（コヤ本体）

表-2 各部材の使用木材種

	舟志(北部)	椎根(南部)
平柱・隅柱	椎、栗、樺、杉	椎
広葉樹	樺、樺、桜、杉	椎
ガワオオドコ	杉	椎
ナカオオドコ	杉	松、椎
マオオドコ	杉	松
トモフサギ	杉	松
ケタ・ハリ	杉、樺	松
ムナギ	杉、樺	松
モヤ	杉	松
ヌキ	杉	杉
カベイタ	樺	杉、樺
ヤネイタ	樺	杉

図-6 コヤの構造と部材名（椎根における聞取りによる）

4. コヤの立地と用途

宅地から離してコヤを集団で建てる群倉立地の見られる集落が多い。宅地内や宅地に隣接したコヤ配置は平地の多い河川流域か、集落内に広い敷地を確保しているかつての支配階級の家が多い。

コヤの主な用途は穀物類と家財道具の保存である。前面には農作業を行なうための広場であるベードコ⁸が設けられ、またコヤの軒下、内部でも作業が行なわれており（図-3）、単なる収納空間ではなく、作業空間としての機能も併せ持っている。穀物の他にも衣類や什器、貴重品等も収納され、下屋に付室を設け味噌等の加工食品を保存することも多かった。特殊な用途として台風等の災害時における避難小屋、出産時の産屋、死者が出たときの忌み小屋などにも利用され、農業生産と深く結びついた再生装置としての意味づけが読み取れる。

5. 構法の概要と生産体制（図-6 参照）

5.1. 構法の概要

コヤの基本形式は高床構造の平屋建てで、壁は板張り、屋根は石葺きである。高床構造とはいえ床高はそれほど高くはない。基本的

な建築構法は全島に亘って共通しているが、下屋の形式によって3つの類型に分けられる（図-4）。洪水の多い地域では床高さが上げられ、また特殊な形式として2階建てのものも見られる（写真-1〜4）。

1室のものもあるが多くのコヤの内部は2〜3室に仕切られ、それぞれの収納物に応じて室ごとに「ヒョウモン（俵物・穀物のこと）ゴヤ」「イショウゴヤ」「ミソゴヤ」などとよばれている。

建築の規模について、梁間寸法はほとんどのものが3m前後で一定しているが、桁行き寸法は3m〜10m程のものまであり（図-5）、桁行方向の拡大によって建築規模を調整する。

5.2. 生産体制

コヤは現在でも利用されており、また近年まで建築されていたため、大工への聞取りによりその建築過程を知ることができる。

5.2.1. 使用木材種

柱および足固めの材にはシイに代表される広葉樹の硬木、横架材には松、壁板には杉が用いられる。平柱にはシイの他にクリ・カヤ・モミ・マツの使用例が確認できた。全般的に鼠害を防ぐために広葉樹の硬木が好まれる。隅柱のみ硬木を用いるという使い分けもされる。北部と南部で部材ごとの使用木材種に相違が見られるが（表-2）、

表-3 実測を行なったコヤ一覧

実測番号	集落名	建築年代(根拠)	コヤ本体		下屋含む		平柱幅	桁高さ	各部屋の収納物	下屋	注記
			桁行	梁間	桁行	梁間					
1	舟志	明治29(墨書)	9.007	3.321			326	2.208	穀物・衣類等	無し	一般的なコヤ
2	舟志	不明	9.460	3.669		4.829	264	2.365	穀物・衣類・什器・味噌	前面	下屋にミソゴヤを設置
3	舟志	不明	10.982	3.033		4.078	230	2.181	穀物(大豆・米)・味噌	前面	2棟を一体化して利用
4	舟志	不明	3.647	3.660			276	3.375	不明	無し	2階建て。構法も特殊
5	志多留	不明	8.735	3.155			318	1.942	不明	無し	隅柱にも互平材を使用
6	三根下里	1900年(伝承)	6.824	3.694			324	2.282	穀物・衣類等	無し	床高が高く、床下を利用
7	仁位	江戸時代(伝承)	7.714	3.315			358	2.339	穀物・衣類等	無し	柱間隔が2種類
8	椎根	昭和32(板図)	6.248	3.145	8.278	5.077	468	2.307	穀物・衣類等	四方	最も近年の建設
9	椎根	19世紀中頃(推定)	6.589	3.833			325	2.331	不明	無し	宮地嶽神社に移築
10	久根田舎	大正時代(伝承)	9.757	2.960	11.293	4.434	365	2.105	穀物(米・麦)・衣類等・味噌	四方	ミソゴヤを妻面に増築
11	久根田舎	昭和初期(伝承)	5.800	2.715		4.215	360	2.205	穀物・衣類等	前後	前後に下屋を持つ
12	久根田舎	不明	4.975	2.570		3.290	295	2.055	不明	前面	肥後民家村に移築

※桁行・梁間寸法はコヤ本体部分の外形寸法。平柱幅は桁行方向で最大のもの。桁高さは平柱接地面より桁材下端まで。単位はmm
 ※No.9の建築年代は、野村孝文氏の推定による

写真-1 前面に下屋のつくコヤ

写真-2 四方に下屋のつくコヤ

写真-5 舟志のコヤ 外観

写真-6 舟志のコヤ 内部

写真-3 床の高いコヤ

写真-4 2階建てのコヤ

これは対馬が南北に長い島であり、南北で樹相が異なるためと思われる。

5.2.2. 生産組織

対馬においては現在でも地域社会に根ざした建築生産方式がとられることが多く、建築主と大工が一貫してその生産過程に関わっている。大工は施主の所有する山の木材を選定することから始まり、製材、加工、建て方、上棟祝いにおける神主役等、全ての作業を統括している。山師、木挽き等に指示を与えると同時に、自らも作業を行なった。

5.2.3. 寸法計画

コヤの規模は桁行方向の拡大によって調整されるが、それを決定するのは敷地面積の広さと建て主の希望である。また柱間隔にも基準となる寸法はない。入口の内々寸法のみが収納物の種類によって大まかに決められており、その他の柱割りは均等割りにするか壁板に使用する板材の幅によって決められる。施工上困難が生じると思われるが、「シャクジョウ(尺杖)」とよばれる桁行きと同等の長さの細材に墨を打ち、物差しとすることで解決している。

6. コヤの実測調査

本調査においては12棟のコヤの実測調査を行なった(表-3)。その中から、北部の前面に下屋を持つ形式、南部の四方に下屋を持つ形式、文化的な先進地域で見られる2階建ての形式の3例について報告する。

6.1. 舟志 実測番号2 (次頁図-7, 写真-5.6)

北部に多く見られる、前面にのみ下屋を設け、収納空間・縁側を付加した形式。

道沿いの群倉内に立地するが、入口が直接道に面していないため梁間寸法の制限がなく、下屋を造り出し、正面に大きなカンソウバ⁸(作業場)をもっている。内部は3部屋に仕切られ、向かって左がヒョウモンゴヤ、中央がイショウゴヤ、右がドウゴヤ。下屋部分はミソゴヤである。

柱間寸法が統一されており、寸法のばらつきが大きなコヤ建築のなかで珍しい。部屋境の梁は折置で組まれ、外部に持ち出された梁が腕木として利用されている。室内部分の梁は直材を用いて束を立てている。屋根板のコヤ本体部分は厚板による張りであり、下屋部分は垂木を設け薄板を横張りしている。

6.2. 椎根 実測番号8 (次頁図-8, 写真-7.8)

南部に多く見られる、四方に下屋を回し入母屋とした形式。昭和32年に建設され、建設年代が確認された中で最も新しい。

川沿いの群倉内に立地している。椎根の大工が自ら施工し所有している。柱間寸法のとり方が変則的であるが、これは入口の間口の寸法には収納物によって一定の基準があるため、まず入口周りの柱間寸法を決めてから他の柱を配置したためである。梁間寸法は標準的であるが、平柱が2本配置されている。梁・桁にはマツ、ガワオオドコの敷居に当たる部分はクワノキを用い、その他の材は板材を含めて全てシイである。屋根板は①と同様に、下屋部分にのみ垂木を設けている。トモフサギは厚板を重ねて形成されている。室内部分の梁は大きな松の曲材によって架けられている。床板の下にも目板が張られ、壁板は吸付き棧の加工が施されている。

全ての加工において最良と思われる技術が使われており、対馬のコヤの辿り着いた最終形であるといえる。

図-7 舟志のコヤ-1 平面図、断面図

図-8 椎根のコヤ 平面図、断面図

図-9 舟志のコヤ-2 平面図、断面図

写真-7 椎根のコヤ 外観

写真-8 椎根のコヤ 内部

写真-9 舟志のコヤ-2

写真-10 舟志のコヤ-2

6.3. 舟志 実測番号4 (図-9, 写真-9.10)

対馬には珍しい2階建ての形式。本調査では6棟が確認されたが、いずれも鰯浦、舟志、豆鮫といった文化的な先進地域であった。

屋敷近くに単独で立地している。2階にも鍵付きの出入りが設けられているが、現状では内部に階段が設けられている。かつては2階に直接出入りしたものであると思われるが、各階の収納物や利用法は不明である。2階建ての形式のものの中には、傾斜地に接して建てられ、1・2階の入口を反対側に設けることによって、谷側から1階に、山側から2階に入れるよう工夫したものもある。

柱にはマツ、梁にはスギ、イタジキザシ⁹にはクリが用いられ、壁板はスギである。屋根は垂木構造となっており、小屋組みには登り梁が用いられている。登り梁の使用が認められたのはこの1棟のみであった。妻面はナギイタ¹⁰によって塞がれており、東によって棟木を支えている。ヒラバシラと胴差の仕口は、イタジキザシの仕口と同様の形式で組み、柱はすべて通し柱となっている。ヒラバシラと2階床梁の仕口は特殊な組み方だが、詳細については確認できなかった。その他の構法については一般的な構造と同様である。

7. 建築構法の詳細

7.1. コヤの架構 (図-6 参照)

対馬における建築構法の中で最も特徴的なのはヒラバシラの使用とその仕口 (次頁図-10~12) である。ヒラバシラは見付 180~420 mm、見込 120 mmほどの長方形断面の柱で、全てのコヤにおいて使用されている。ヒラバシラの製材においては、丸太を半割りにして形を整えるという古い手法による製材法がとられていた。ヒラバシラと足固めの横架材 (ガワオオドコ) はカワシオオドコとよばれる仕口によって組まれている。これはケンドンのように材をかわし、センを打つことによって固定する組み方 (図-13) で、構造材の組み方としては他に類例がない。

スミバシラには正角の材が用いられる。ガワオオドコとスミバシラの仕口は1枚柄、2枚柄のものが多いが、北部の舟志集落においては非常に複雑で特殊な仕口が工夫されている (図-14, 15)。

トモフサギとよばれるコヤの妻面の材も特徴的である。妻面における梁材、また妻側の梁と屋根面の間の板材を指す。板材によって棟木と桁を支えており、1枚の厚い板で作るのが良いとされる。2

枚以上の板を用いるときは、ダボとメジボウによって隙間を完全に塞ぐ（図-16）。北部においては棟木を束で支え、薄板で塞いでいるものが多い。

部屋境の梁材には直材が用いられ、その上に束を建てることによって棟木と母屋を支えている。部屋中央部分の梁は曲材を使用することによって束を省き、室内空間を広くとっているものが多い。

貫はヒラバシラを貫通せず、下げ鎌によって固定されるのが一般的である（図-17）。ヒラバシラの見付幅が小さなものでは貫がヒラバシラを貫通しているものも見られる。

ヤネイタ・カペイタ・ザイタの各板材と構造材の取り付け部分においては、板材は構造材に掘られた溝に差し込まれる。ヤネイタは30mm程度の厚板が屋根の両端から設置され、中央の板をカケヤで下から叩き込むことによって、水が漏れぬよう隙間無く仕上げられる。近年の建築のものでは、屋根下地にルーフィングが用いられるため、棟木に溝は掘られない（図-18）。カペイタはヒラバシラの間を1枚の板で塞ぐのが理想とされる。1枚板へのこだわりから、吸い付き棧によって一体化されたカペイタのパネルをヒラバシラ間にはめ込むという手法も見られる。カペイタとザイタにおいては、さらに目板で隙間を塞いだものも見られる。

入口部分のヒラバシラと建具の取合いにおいては、戸当り部分のヒラバシラをL字型に欠き込み、確実に密閉できるよう工夫されている（図-19）。

7.2. 石屋根の構法

石屋根は、主要な屋根板部材と、その隙間からの雨水の浸入を防ぐためのメイシ（目地板部材）、棟押さえのムナイシに分けられる。南部においては葺き石に厚さ45～60mm程度、タタミ1畳程の石材が

用いられることがあるが、これは実用以上に財力の誇示としての要素が強い。一般的には各集落付近でとれる厚さ15mmほどの石を乱積みにしたものが多かった。葺き方には間隙材を挟むことによって屋根勾配を一定に保つものと、そのまま葺き重ねていくものがある。石屋根は維持管理に費用がかかるため、現在では瓦葺に変更されているものが多い。石屋根の構法の詳細と施工法については、稿を改めて報告したい。

8. コヤ各部寸法の比較による地域差の検討

本調査において舟志集落（北部）で84棟、久根田舎、久根浜集落（南部）で78棟の全てのコヤについての基本寸法の採取を行なった。その実測結果に基づき寸法計画の地域差を検討する。

8.1. 面積の分布

梁間・桁行寸法を比較すると（前出図-5）南部において梁間寸法のばらつきが見られるが、建築面積に関して南北は同様の傾向を示している（次頁図-20）。しかし1室あたりの床面積は北部において分布が散っている（図-21）。収納物の種類に応じて床面積を細かく調節したものであろう。また、北部の舟志においては1軒につき2棟のコヤを所有し、南部の久根田舎・久根浜においては1棟のみ所有することが多いことも考慮すると、北部地域の農業生産の豊かさが推測される。

8.2. ヒラバシラ見付寸法の分布

ヒラバシラの見付寸法は南部において大きなものが多い（図-22）。南部においては屋根葺き材に巨大な石材を用いることとの関連が予測されるが、屋根荷重に直接関わる梁間寸法との対応は認められない（図-23）。しかし桁高さとの間に比例関係が見られ（図-24）、柱

の座屈を考慮した寸法計画が確認できる。

8.3. 下屋の形式

北部においては下屋無し：64棟／84、前面のみに下屋：21棟／84なのに対して、南部においては四方に下屋：65棟／78であり、地域差が明らかである。

図-20 コヤ建築面積の分布（コヤ本体）

図-21 1室あたりの床面積の分布

図-22 ヒラバシラ見付寸法の分布

図-23 梁間寸法と平柱見付寸法の関連

図-24 桁高と平柱見付寸法の関連

9. まとめ

本調査によりコヤの分布状況、形式の類型、構法の詳細、南部と北部における寸法計画の相違について明らかにすることができた。しかし、コヤには建築年代の明らかなものが少なく、構法の変遷を仮定するには至っていない。

対馬のコヤの建築構法には他の地域に見られない手法が用いられ、特にヒラバシラの使用とその仕口は特徴的である。ヒラバシラの使用理由については、巨大な石屋根を使用する南部地域において見付寸法が大きく、また桁高さに比例して大きくなっていることから、石屋根の荷重に対応した構造部材であることが明らかになった。しかしこれはその理由の一端に過ぎず、その他にも南方からの文化的な影響や木材加工技術の変遷等の検討を加えることが必要となる。カワシオオドコの仕口においては、通し貫の用いられない壁体の弱さを補い、足固めをヒラバシラに緊結し柱の開きを押さえる役割を果たしている。また、幅の広いヒラバシラを外面に対して美しく見せるという意匠的な意味ももつ。

構法の特徴としては、その他にもトモフサギの使用やスミバシラの仕口、板材の施工方法などにも特色が見られ、この地域の特殊性を示している。これらの部材の加工においては、部材の変形を最小限に抑えることにより隙間を生じない工夫がなされている。これは使用木材種の選択と併せて、鼠害を防ぐための工夫である。

対馬のコヤは既往研究が少なく、本研究においてようやく基礎資料がまとめられた段階である。平柱はコヤのほかにも主屋のダイドコ周りの柱、ウマヤの柱にも用いられている。今後はこれらの建築物の構法を比較することによって各構法の特徴を捉えコヤの建築構法を位置づけていきたい。

注・参考文献

- 1) 「コヤ」は基本的な機能において板倉に分類できるが、特殊な用途として災害時の避難小屋、出産時の産屋、死者が出たときの忌み小屋などにも利用され、「クラ」の概念に収まりきらないため、本稿では現地名の「コヤ」を呼称として用いる。
- 2) 石原憲治, 対馬の民家, 九學會連合対馬共同調査委員會編, 対馬の自然と文化, 古今書院, pp. 318~339, 1954. 9
- 3) 浅川滋男, 離島の建築(日本の美術; 406), 至文堂, pp. 26~41, 2000. 2
- 4) 群倉立地について主要な論文を以下に示す。
伊地知寿子他, 集落内の共有空間-対馬の集落空間構成に関する研究その2, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 1994
伊地知寿子他, 土地所有から見た集落空間-対馬志多留の集落調査報告その2, 日本建築学会中国九州支部報告 第35号3, 1995
松永達, 対馬の民家および集落の空間構成と聖性に関する研究, 学位論文, 1997
- 5) 矢野道子, 対馬の生活文化史, 源流社, pp. 57~76, 1995. 4
- 6) 近世の対馬では海沿いの村であっても漁業を生業とすることは許されず、公領の土地を分けなしておいて耕作させ、年貢を納めさせた。参考文献4, p. 23
- 7) 近世においては鎖国が建前であり、また密貿易を防ぐ目的もあり、頻りに朝鮮人が訪れる地域でありながら外国人と一般庶民との交流は厳しく制限され、集落外への移動も自由にはならなかった。
- 8) コヤの正面に設けられた穀物を乾燥するなど農作業のための広場。赤土できれいに固められ、常に清潔に保たれた。地域によって「ペー」「ペードコ」「ツシロ」などと呼ばれる。
- 9) 舟志における足固め材の呼称。椎根と舟志では部材の呼称が異なるものがある。舟志においては、ヤネイタ:「ジイタ」、トモフサギ:「ナギイタ」、ガワオオドコ:「イタジキザシ」、ナカオオドコ:「オオビキ」、マオオドコ:「コネダ」と呼ばれる。
- 10) 注8参照

[2007年4月20日原稿受理 2007年7月26日採用決定]